デカセギから隣人へ ⑦

南米日系人はいま

言葉の壁越え高校へ

向学心

浜松市に住む日系ペルー人3世の宮城百合子さん(17)は県立浜松北高校定時制に通う。

自分のことを「希望の星」といって笑う。理由を尋ねると「百合子が高校に行けたから、妹やいとこも勉強し始めたんだよ」。将来の夢は通訳になることだ。

小学5年生の冬、日本の工場に出稼ぎに来ていた父の元へ、母、姉、妹と一緒にペルーの首都リマからやってきた。近くの市立小学校に編入したが、日本語は全くできなかった。いじめにも遭った。「男の子たちが笑うの。でも、何言ってるかわからなくて……」

日常会話をなんとか覚えて中学校に進んだが、授業はほとんどわからなかった。3年生になり、進路を決める時期になると、不安でたまらなくなった。日本人は当然のように高校に進学する。日系人の友人は就職する子が多い。自分はどうしたらいいのか。

支えてくれたのは、中学校で日本語を教える地域のボランティアの人たちだった。浜松市の主婦吉田公子さん(55)と放課後、一対一で復習した。勉強したいという気持ちがどんどん強くなり、定時制高校への進学を決めた。入試の作文に通訳になりたいという夢をつづり、合格。合格のうれしさは今でも忘れられない。

「日本語」支援

百合子さんを支えた吉田さんは約4年、日本語ボランティアを続ける。日本の高校への進学をあきらめた日系人の子どもたちをたくさん見てきた。

日本語能力は劣るが、数学の問題をすらすら解く日系ブラジル人の女子生徒がいた。全日制の公立高校への進学を希望したが、学校側は日本語力が足りないとして認めなかった。結局、彼女は無認可のブラジル人学校に進んだ。卒業しただけでは、日本の大学受験の資格は得られない。

文部科学省の昨年の調査によると、日本語指導が必要な児童生徒数は県内で2343人。うち中学校で指導が必要な生徒は402人。だが、高校は7人と極端に減る。この傾向はここ数年変わらず、日本語能力がないと高校には行けない現実がかいま見える。

吉田さんは、米国の大学に付属するESL（English as a Second Language＝英語を母語としない人々のための英語学習クラス）のようなシステムが理想的だと考える。入学前に一定の日本語能力を持てるよう、別枠で集中的に教育するシステムだ。

外国籍クラス

公立高校の新たな取り組みもある。浜松市は4月、外国籍の生徒を対象にした全日制の「インターナショナルクラス」を浜松市立高校に開設した。ポルトガル語、英語の2コースがあり、日本と外国の架け橋になる人材の育成を目指す。ポルトガル語コース志願者は受験科目のうち国語以外を母国語で受験可能にした。日本語で受験する場合は、国語以外の設問の漢字にルビがつく。

ポルトガル語クラスにはブラジル人生徒3人が、英語クラスには中国人生徒1人が在籍する。日系ブラジル人の広瀬サユリさん(16)は合格が自信となって、さらに勉強する意欲がわいたという。湖西市に住む日系ブラジル人の中道マリアナさん(16)は毎朝5時に起き、始業1時間前には学校に着いて勉強する。4人とも、日本の大学へ進学を目指している。

だが、今年度は募集20人に対して志願者は8人、入学者は4人と大幅な定員割れを起こした。日系人や学校関係者の中には、実際に子どもたちが合格できるかどうか不安に思い、受験を控えさせた中学校もあったのでは、との見方もあり、入学者数を増やすよう求める声は強い。

日本で学ぶ意欲を持つ子どもたちにどう応えていくか。地域で、学校で、模索が続いている。

「きょうは英語のテスト。緊張してる」と話す宮城百合子さん＝浜松市中区広沢1丁目で

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。